

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 観光学 研究科 観光学 専攻		
指導教員	所属・職名	氏 名	
	観光学部・教授	白坂 蕃 印	
自然・人文の別	自然・ <input type="checkbox"/> 人文	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人・共同 名
研究課題名	韓国、水安堡温泉の発展過程に関する研究		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	観光学研究科・観光学専攻 博士課程前期課程 1 年	具 珍亨 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏 名	
	観光学研究科・観光学専攻 博士課程前期課程 2 年	具 珍亨	
研究期間	2006年度		
研究経費	200千円		

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、韓国における水安堡温泉について歴史的発達過程を分析し、その時代的
 形成過程の特性、および観光地としての社会経済的構造を明らかにした。また、韓国温
 泉地開発の基準となる温泉法と関連する諸制度や温泉権をも明確にすることによって、
 韓国における温泉観光地の一側面を把握することを目的とした。

研究の結果、1980年代以来急速に成長してきた水安堡温泉の地理的背景と観光地の成
 立過程が明らかになった。そして、観光施設、入湯客の特性、韓国における温泉権と法
 制度等を観光地理学的・地理学的側面から検討することができた。また、国道3号線が拡
 充されはじめたことによって、ソウルだけでなく他の都市との交通が便利になり、宿泊
 業においては、ソウル等からの外来資本の進出が活発に行われたし、宿泊施設も内湯化
 されたことが分かった。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[水安堡温泉] [変容過程] [温泉権]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

韓国では、第二次世界大戦前に日本人が温泉旅館や共同浴場を経営していたが、戦後の開放後、その温泉があまり利用されず、停滞的であった。しかし、1970年代に経済の高い成長をとげて、国民の生活水準は向上し1980年代に入ると、国民旅行が普及した。そして、ソウルオリンピックを経験し、高速道路網が全国的に整備され、国民生活にもゆとりがでてきた今日、温泉地はかつての日本と同様に療養・保養の機能から観光や慰安旅行の宿泊拠点へと変質しつつある。

このような観光旅行は、従来、季節的に特定時期に集中してきた形態から、冬季旅行にまで拡大され、ほぼ全年を通して利用される傾向にあるといえる。冬季旅行は、主に温泉地を中心に行われているし、これによって温泉集落が各地に形成されている。温泉集落は温泉資源を生産手段として、入湯客にサービスを提供する旅館業を中核としながら、これに関連したサービス業や土産品、飲食店等の商業によって構成されている。これらは、もっとも消費的な機能の強い都市的な集落である。

温泉集落は従来、近隣地域からの農民層の来訪によって支えられてきたし、療養温泉地としての機能を持っていた。しかし、近年、経済の高い成長につれ、また交通が発達することによって、大都市と結合できる温泉集落は、従来の療養的機能に都会人のための休養地的機能を加えることになる。その後、旅行形態の変化によってその性格が強化され、観光産業も大規模化し、多様化し温泉集落の性格が一層著しくなった。したがって、温泉地は複雑な社会経済的構造を持った複合構造体として機能していると考えられる。

そこで本研究では、従来の研究をふまえつつ、水安堡温泉についての文献や各種統計資料、旅行案内報告書、旅行雑誌などを用いて各テーマに沿って、水安堡温泉の諸相を明確にした。

また、図面、表、写真などを幅広く収集し、戦前戦後の歴史的な部分は水安堡温泉の歴史をたどり、その時代的発達過程の特性と変化を確認した。

本研究では、水安堡温泉の歴史的発展過程を社会、経済影響とともに以下の4つの段階に分けて考察した。

1) 日本軍人の利用の浸透期 (1903年～1915年頃)

チョップ山、超山、黄山の3つの山に囲まれ、石門川が貫流する盆地に位置している山村型温泉地である水安堡には、この当時の重要幹線道路である嶺南路が貫通していて、嶺南路沿いに2軒の国営旅館が設けられていた。そのため通過する官員の滞在と温泉の利用が比較的が多かったこの温泉地に、1903年頃日本駐屯軍によって温泉の掘削が行われ、専用浴場が設置された。また、1908年には憲兵出張所専用浴場も設けられた。

2) 日本人による大衆歓楽型観光地への変貌期 (1916年～1945年)

この時期における水安堡温泉への交通は1925年に京釜線の支線である忠北線の部分開通(鳥致院～清州)、1928年忠北線の開通、忠州～店村間の1等道路、清州～槐山間の2等道路の開通などで、これにより広域的交通条件が格段によくなる。1916年には既存の共同浴場の経営を日本人である二葉寺島(二葉旅館の経営者)に委任するようになる。二葉氏はそれを改装し、既存の共同浴場の上部(共同浴場から北)に二葉旅館を新築、また共同浴場の改装を行い営業するようになる。これをきっかけに水安堡温泉には、旅館が次々と開業された。1925年には星野氏が二葉旅館を買収して、星光旅館を開業するなど、この時期の水安堡温泉は、日本の民間人の主導下で、近隣地域(忠洲、槐山)住民の利用による保養型温泉地から大衆歓楽型温泉地へと突入しつつある過渡期といえることができる。

3) 韓国人による大衆歓楽型温泉地としての定着期 (1963年～1985年頃)

第二次世界大戦以後、各温泉地とも再開発、新規開発が起り、また国民の温泉利用も増加するようになる。1964年から年々大型歓楽型の宿泊施設(ホテル:3ヶ所、旅館:2ヶ所)、遊楽施設の開業と集積が進行して行く。また、1964年から1985年まではほぼ毎年、温泉の掘削も行われ、さらに1975年の温泉水貯蔵タンクの設置によって温泉水を集中管理することが確立され、温泉水の乱掘削が食い止められた。

研究成果の概要 つづき

水安堡温泉が韓国人利用者による大衆歓楽型温泉地として定着していく時期といえる。

4) リゾート型温泉地への変容期 (1986年～現在)

1989年からの都市計画再整備によって、温泉地入口にあたる北側の山荘とバスターミナルの周辺の新たな商店街地区の開発が進められる。この開発は付近の黄山の斜面に1989年に開発されたスキー場と既存の温泉場を連絡づけるためのものであって、既存の温泉場内の水安堡橋からバスターミナルまで、さらにバスターミナルからスキー場までの道路が新たに敷設される。これらによって、水安堡温泉は、大衆歓楽型温泉地からスキー場を含むリゾート型の温泉地へと変容しつつある。

次に、宿泊施設の増加傾向についてみると、1970年以降水安堡温泉を訪れる温泉浴客数が、増加するにつれ、宿泊業所も既存の旅館を観光旅館として、その性格を変換させ、内湯旅館の浴湯拡充や外湯旅館の内湯化を模索するようになった。

1885年の宿泊施設の状況は、27個所に総客室数が756室であり、受容能力は3,545名である。そして、ホテルが184室に924名、旅館は554室に4,511名を受容できる施設を持っている。この中で、旅館が温泉地宿泊施設の大部分を占めている。

次いで、入湯客の特性と誘致圏を観光客の月別および季節別波動から考察してみた。入湯客の季節性は日本とは異なり、秋季から冬季にピークがあり、夏季はオフシーズンとなっている。観光客の月別変動をみると、12月がもっとも高く14.0%を占め、10月、11月、1月の順に平均値以上を占めている。そして、4、6、8、9月が平均値、2、3、5、7月が平均以下である。水安堡温泉も12月がピークである。

一方、季節別にみると、水安堡温泉は秋(31.3%)、冬(28.8%)、春(20.0%)、夏(19.9%)の順になっている。これは、雨地域の温泉所在地の差異から出ていると考えられる。特に水安堡は9月から上昇し、12月にはピークを形成し、1月まで高い比率を表し、秋冬季節が春夏季節より高い比率を表している。これは温水と寒季節に密接な関係があると思われる。

さらに、温泉観光地の来遊範囲入湯客の居住地別構造をみると、ソウルが39.3%で首位を占める。そして、次いで本温泉の所在地である忠清北道が24.3%を占めていて、ソウルと忠清北道の両地域が温泉利用客の半分以上(63.7%)を占めている。このような高い比率を表している理由は、前者の場合、水安堡温泉までの交通が便利であり、都市居住者が地方居住者より旅行に参加する比率が高いからである。

これに対して、後者は、近接効果の影響が作用したと言える。水安堡はソウルの依存度が著しく高く、これは第3号国道と準高速道路が開通して、ソウルと2時間半で結ばれるようになったことが大きく作用していると考えられる。

最後に、韓国における温泉権の形態についてみると、1901年に京釜鉄道株式会社が設立、され、鉄道敷設が開始された。1919年に朝鮮内の私設鉄道事業の本格的展開によって、韓国全土の広域交通条件が強化されるようになった。

特に1920年代は、日本の私設鉄道会社による鉄道開発が進展し、既存温泉や新規温泉が開発・運営された。1922年頃、南満州鉄道株式会社は朝鮮瓦斯電気株式会社の温泉事業を引き受けて鉄道ホテルと療養所を建てた。鉄道では、京釜鉄道の支線である長項線と忠北線が開通し、韓国全土の交通網が整備されたのである。

温泉地開発の場合、1964年に水安堡温泉では都市計画準用決定告示をし、温泉地域内の無秩序な開発を防止するため、郡の主導で温泉地が整備された。また、水安堡温泉では、1974年に都市計画整備とともに、1975～1976年に温泉水貯蔵タンクの建設と中央管理システムが整備された。大部分の温泉開発は都市計画に基づいて主に民間資本による開発が行われてきた。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①から④までは特に該当ありません。